

浄土

十二月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別扱承認証第三五二号)
昭和三十九年十一月二十五日 印刷 昭和三十九年十二月一日発行

第三十卷

第十二号

触地印を結ぶ仏陀

ベンガル出土 十世紀

ガンジス河口の三角州を中心とするベンガル地方に仏教がひろまるのは比較的遅く、しかも土着の民間信仰や、ヒンドゥー教のタントラの影響を受けた密教が中心になっています。特に回教の侵入以後は、社会の表舞台に立つより、民間信仰の中にかくれ込むような形で続いて来たとも言えます。したがって仏教美術もヒンドゥー教のそれとごく似かよったものが多くみられます。ここにあげた仏像にしても、全体的にふくよかさを失い、なんとなく力づよいものを感じません。両側の脇待にしても、ヒンドゥー教の、シバ・ヴィシュヌなどのパンセオンに現われる諸神とみまがうばかりになって来ています。蓮華座にすわる仏陀の衣はマトウラ仏などと同じ様に薄くひだが平行に走っていますが、マトウラの調和のとれたなめらかさは失われています。十世紀と推定されるこの仏像は、固定化したベンガルのバーラ朝様式の中ではみるべきものですが、観音、弥勒を始めとする密教の仏、菩薩は、全くヒンドゥーの神々と交錯している感があります。

(佐藤良純)

年末年始には鑽仰会の施本で

浄土宝暦

おくってよろこばるれ
四十年暦

価格

一部 二十五円
百部以上 単価

十円
十八円

内容

浄土宗信徒心得
一枚起請文
年回表 その他
暦記事満載

見本は切手三十円御送り下さい

四十年版 修養ひめくり

価格

七十円

三十円

体裁

タテ 43 CM

ヨコ 14 DM

用紙十七枚

二色刷

四十年度日曜表付

割引

五十部より 単価 六五円

送料

百部より 六〇円

実費

法然上人鑽仰会

東京都千代田区飯田町一丁目二番
電話(262)5944
振替 東京八二一八七番



念仏の時、悪業のおもはるる事は
一切の凡夫のくせ也。

法然上人御法語

— 目 次 —

表紙 触十印を結ぶ仏陀

随 想	山口勝存・白土わか・安居香山…(2)
仏書を奉じて.....	巖 谷 勝 雄…(4)
亡霊について.....	樋 口 亮 栄…(27)
— . — . — . —	
近世文名録 藪内彦瑞僧正.....	高 橋 良 和…(8)
東南アジア旅行記.....	佐 藤 行 信 (10)
茶の湯に性 性 性.....	林 左 馬 衛 (14)
家康と登誉天室.....	鶴 田 湛 泉 (20)
— . — . — . —	
紹 介 諸戸素純著「法然上人の現代的理解」	(19)
御法語をいただく.....	(7)
表紙の解説	(1)
— . — . — . —	
信仰の手びき.....	宮 林 昭 彦 (28)

京の事始め

山口 諦 存

(知恩院・教務部長)

京都は伝統の街である。今もなお、王城の都としての、ゆかしい行事が生きている。

わけでも十二月の京暦は、まず南座の顔見世興行の初日で、はなやかに始まる。大きな丸い紅燈籠の灯が加茂のせせらぎにゆれて流れる夜景が、一入あわただしく思われるのも師走を肌に感ぜさせられるのである。

十三日は事始(ことはじめ)である。この日から正月の仕度を始める。各分家がご本家へ、弟子が師匠へ、町家では主家へ鏡餅を一組、裏白とゆずり葉で飾り、持参して歳暮の品を贈答する習慣が今も行なわれている。

とりわけ祇園街では、芸舞妓さんのキレイどころが、井上流京舞の家元井上八千代さんの宅や、芸事のお師匠などへ、独特の京ことばで挨拶に廻る風習は、華麗な中にどこことなくつましさのある、京ならではの歳末風景ではなからうか。

故 山

白 土 わ か

(大谷大学講師)

夏の休暇も終りの八月の末、京都のG教授が、浄土宗名越派の資料を調べるのに、私達の郷里、東北の東南陽に來られたときのことかつての名刹、専称寺も如来寺もいたく荒れたさまに心痛めつつ、更に教授の希望もあって、阿武隈山中の赤井嶽に車を走らせた。大雨ののちの崖くずれもあって、素人運転は些か心もとなかったが、はや山道には、薄の穂や萩がむらがり、また時折、吾木香や撫子が見え、楮や撫の木々も見え出して、さすがは東北の山らしい。

山上の赤井嶽薬師は、天平の頃の草創とつたへ、更に徳一法師が興したという。この地方の霊場であった。寺域は二十年ほど前に焼けてさびしくなったが、新しい本堂におまいりしてのち、私たちはお竜燈場に腰をおろした。ここは山の一端で巨木の杉の枝がくろく下方、山なみをへだてて、模湖とした町や村

涙

安 居 香 山

(大正大学講師)

われわれの生活から、もし涙を取り去ったら、さぞ無味乾燥なものになることであろう人間生活のすべては、喜怒哀楽愛惡欲で表現されるのであるが、これらにはみな涙がついている。

勿論、涙は人間にだけ限った事ではなさそうである。かつて私は、犬の涙を見たことがある。果して、犬が喜怒と共に、涙を出すものかどうか知らないが、久し振りに帰って來た私を迎えて、わが家の犬が夢中でしっぽを振り、目に涙をためていたことがあった。

「犬にも涙があるのだ」

と一入感慨に耽ったものである。

ともあれ、この人間の涙は、人間が感情を表現する最も卒直で、いっわりのない表現である。

変ったのでは「笑い泣き」という涙もある又、転げる程おかしい笑いで、笑いがとまら

事始め忘れし恩のおもはるる（青々）

平素は忘れがちな、主家から分けられた「のれん」のお蔭、芸事に厳しかった師匠のご恩と、私の今日あることを感謝し喜ぶことも、事始めの意義であろう。

年々、事始めという古来の行事に当って、私という存在が無量の恩によって、在らしめられていることを思うことも尊いことである。仏教に父母・国王・衆生・三宝の四恩が説かれているが、思えばこの世に生をうけて今日まで、大自然の恩恵はもとより、すべての大恩に生かされていることを知らされるのである。

京暦を更に緋けば、廿一日終い弘法・廿五日終い天神・知恩院のお身拭式、卅一日除夜の鐘となる、寛永十三年卅二世雄誓靈巖大僧正の鑄造した、一万八千貫の大鐘の低く長く響く鯨音が「ご恩、ご恩」と撞きおさめられる。この頃から八坂神社（祇園社）の「おけら」詣りとなって、多彩な師走を終えて新しい春の暦に変わるのである。

をこえ、太平洋の水平線を見はるかすところにある。一条の夏井川が海よりさかのぼって山裾にかくれる。昔は、夜毎、お竜燈があつた川を海から遡って、この赤井嶽に達したといいお竜燈場は、人々がお籠りをして拝んだ所なのである。かたわらの小さな碑にも、常陸の赤水なる人が、無数に川を遡って、赤井嶽の杉間に消える陰火を見たとき記している。この赤水という人は、教授の言葉によれば、伊能忠敬の先駆をなした地理学者だそうである。

しかし、今の人々には竜燈も陰火も見えなくなつてしまった。が、もしこの山崖に、巨大な鐘をつつて、朝な夕なについたらと、山姥の幻想が、ふとよぎって、撞木をもって、といったら、今ならサイレンスイッチですよと教授がいった。

鐘の音は、麓の人々に達せぬであろうか。ふるさとの人々の心にはきつとしみゆくにちがいない……。少くとも阿武隈の放しがいの馬たちは、それに応えていなくだろう。馬の走るスロープがゴルフ場にくぎられてしまったいまも。

ぬ時、涙がでることもある。これなどは、笑いの止まらぬ苦しさに出る涙かも知れぬが、全く調子よく涙は出るものである。

しかし、今度のオリンピック東京大会での涙ほど、人間の涙の尊さと、すがすがしさを味わったことはなかった。テレビの画面一杯に映し出されてくる様々な涙に、幾度か、私も涙をさそわれた。

選手自身にしてみれば、この栄光の為に今日まで努力して来たその感激が、涙となって現われてきたのであろう。これを見つめてきた肉身、これを導いて来た監督。そこには、それぞれの感懐があるのであろうが、等しく崇高な涙である。黒い人も、黄色い人も、白い人も、人間である以上、この涙には変りが無い。東洋の魔女といわれたバレーの女子選手も、此の日のためにためておいた涙であった。いや、勝者ばかりでない。敗者にしてもその涙は崇高であった。

涙が人間に共通である様に、万人には差別があつてはならない。オリンピックにみた様に、世界は平和であつて欲しい。

仏書を奉じて

—モスクワよりローマへ—

巖谷勝雄

(祐天寺住職)

去る六月十日より五十五日間「訪デ仏書贈呈国際親善使節」団長駒大総長保坂玉泉師以下三十名が欧、米十七ヶ国を訪問した。これは昨秋デンマークより日本の仏教界に二千冊の聖書が贈られて来たので、その答礼を兼ね大正新修大藏經等千五百冊の仏書を贈呈すると共に仏、基の相互理解と親善友好を深め、人類の幸福と世界の平和に共に貢献せんとの念願から出たものである。私は浄土宗から只一人参加させていだいたのであるが、今その中から見たこと、感じたことを拾って記して見ることにした。

一、モスクワのギリシャ正教々会を訪問して

六月二十二日暑い日である。一行は教会を訪問すると云うことでバスに乗った。私はソ連国である云うので、この国の宗教事情及び国柄などに特に興味を持ち、何ものかを見極めたい意欲にかられた。街路の両側には菩提樹が立ち並び、

其の樹々からは白い花を雪のように降らせ、往き来の人々を惑はせて居る。ショーウィンドは他の国々よりも質素で商品も淋しく飾られて居る。時々労働服を着た女性が道路清掃やトラックを動かして居る姿や、長蛇の列をつくり配給を受けて居るのだろうと思われる御婦人連を見かける。いくつかの街角を曲り、他の国と異った鬱圀氣を感じながら、古めかしい落ちついた教会の塔が、空高く建って居る街角にやって来た。これがヨロホスカヤギリシャ正教々会である。教会の門を人々は繁く出入して居るので聞いて見ると今日は「聖靈祭」であるとのこと。

一行は案内され入口に立って驚いた。数千人も入ろうと思われるこの教会は満員であった。正面段上には大司教がお祈りを捧げ、椅子席には敬虔な態度で信徒が着席し、其の後方には立ちながらその厳肅な行事に吸い込まれるようにお祈りして居る群集。あるいは土下座しながら十字をきり三拝九拝

して居る者、入口の両側に安置されて居る、いくつかの聖なる像にローソクを供養して居る者。死者の遺体を花にうずめ今日の法会に逢わせんとして居る者等老若男女が熱心にこの行事に参加して居る姿は一体私達に何を教えたであろう。

私は鉄のカーテンを通し想像して居たソ連の宗教観を更めて見直さざるを得なかった。このように熱狂的宗教への憧憬の姿は他の国々では見られなかった。後刻政府の宗教担当副委員長他委員と会見懇談したのであるが、ソ連の宗教事情は経済組織等は異って居るが日本と全く似て居り、信仰は自由でキリスト教各派、回教、ユダヤ教、仏教等各々地域を異にし現在盛んに行われて居ると云うことである。又ソ連は宗教に反対することも自由である。然し如何に反対しようと厳然としてこの国に生きつづけて居る諸宗教を政府としてもどうすることも出来得ないのが現況であろう。統制下にある人々の求めて居るものは究極するところ生の問題であり、政治や経済の問題以上に心の安住を願って止まないのが真実の姿であろう。私はこの教会を訪問して戦後漸やく落ちつきをとり戻したこの国の人々の心の中に、自由と真実を求めて止まない息吹きが、やがて大きく波及し、宗教的自覚に立ち感謝と反省と人類愛の上に世界の人々と結びつき、共に、斯くあって欲しいと願ったものである。

一、パチカン国ローマ法皇を訪問して

六月二十七日パチカン国駐在別府大使の厚意により、すべて法皇との会見の手筈を整えて居てくれたので、一行は法衣を着け九時半ホテルミケランジェロをバスにて出発した。こ



(贈呈式)

こから歩いてても二十分位の処である。宮殿の入口には奇麗な衣裳をつけ、槍をもった衛兵が二人立って居た。一行は挨拶を済ませここを通り抜け廻り階段を登って中庭のある処に出た。ここには武装した兵が巡察して居り、少しく緊張を覚えながら補装された中央の道を百米位歩き正面建物の人口より、エレベーターにのり四階で降りた。ここが法皇の居城である。長い廊下、幾つかの立派な部屋に儀仗兵が立ち並び大礼服に身を正し、一行を挙手の礼を以って迎えてくれた。この国には軍隊はないが、法皇に恩義のある各国から、二年交代に護衛の任を受け奉仕に来て居るとのことである。ここを通り抜けると法皇の

重臣とも思われる方々が出迎え、玉座の間に案内してくれ
た。小憩の後、謁見の間に案内され着席して居ると、一行の
後方の中央通路より長身の法皇は白衣の法服を身につけ正面
の玉座に着き、笑顔で我々を迎えてくれた。側近者の
中には日本に長く居たと云うマレラ枢機卿とワンベルクロー
ド司教が居り、日本からの留学神父の東門氏が
通訳をしてくれた。保坂団長先きに立ち

「仏、基の相互理解、親善友好とを計り人類の
幸福と世界平和に共に貢献すべく努力して参り
度い」

旨を述べ挨拶し、これに対し法皇も立ってメ
ッセージを読み、つづいて

「日本の仏教代表者の訪問を喜び、日本の国民
を特に尊敬して居る」と賛え、「必ずや世界の利
益のために責任をつくしてくれることを信じて
居る」と述べ、「今私の方の考えはキリスト教各

派は勿論他の宗教者の方もここに来ていただけるように考え
て居る。団長の申されましたことには同感であり、お互いに
人類の幸福と世界平和のため責任をつくして参りましょう」

との要旨を以って挨拶された。ついで日本からの贈呈品を
献上し、一人一人法皇の前に進み握手を交し「貴下は何宗



(法皇と共に)

か」の問いを以って接せられ、記念品としてメダルを下され
なごやかな雰囲気の中に一同記念撮影をして二十五分に互る
会談を終り、退去したのである。

誠に歴史的会見であり、感激の一場面でもあった。私は今
までの各国の宗教関係者との懇談今又法皇との会見により思
い併せ、今の世界は何か共通した考えの上
に立って全世界が一つの世界になるのであ
る。これは第一、第二次世界大戦を経験し
た各国の人々が、小我的考えを捨て大我に
生きることの正しさと、如何に利益をもた
らすかにつき認識と自覚の上に真剣に考え
始めて居るのではなからうか。対立するも
のは共に傷つき、和するものは共に栄える
の道理を眼前にして、戦前より一歩前進し
て人類愛に立脚する、寛容と和合が人類の
幸福と世界の平和をもたらしものであり、
お互いの利益になると云う考え方が、種々様々な処で感じと
られるのである。即ち仏教的物の見方、考え方が幾多の委曲
あるにしてもやがて世界の思想を導き、大きな力となって現
れてくるような気配を感じざる得なかったのである。

ご法語をいただく

念仏の時、悪業のおもはるる事は、一切の凡夫のくせ也。さりながらも往生の心ざしありて念仏せば、ゆめゆめさはりとはなるべからず。(十二個条問答)

口ではお念仏を申しながら、頭の中ではいつの間にか、利欲のこと食物のこと等々何か他のことがかけめぐっているのに気がつきます。こうしたことを法然上人は「一切の凡夫のくせ也」と仰せられました。「くせ」とは正しくないこと曲ったことをいいます。しかしここに一切の凡夫といわれたことに注意したいと思います。つまり正しくないことに違いないけれども、一人残らず総ての人の持っている習性であるというのです。悪業とは殺生や盗み等の悪い行為のことですが、ここでは軽い意味で、阿弥陀さまに帰命する心以外のこと、常に頭から去らぬ欲望という意味でよいでしょう。

ある人が次のように質問しました。

「家にいても外にいても、念々相続してお念仏を申ししていますが、いつの間にか自然と心が外れて他のことを考えています。こんな具合ではとても往生はできないでしょう」

これに対する法然上人のお答が、このご法語でありました。

心から阿弥陀さまを信仰している者であるならば、お念仏を申しながら間々他のことを考えたにしても、往生には少しの支障にならぬといわれました。その説明に親子の情愛を例にあげられました。

子供が少し位いたずらをして、また口返答をしても、親が子を想う心に何らの変りがないようなものだということです。凡夫であるからには、時によって貪る心が起きましようし、また腹が立って怒りに苦しむこともありましよう。だからといって阿弥陀さまは念仏する衆生を救って下さるというお約束を決して反古にはなさらぬといわれました。

要するに大切なことは阿弥陀さまの本願を信ずるかどうかの点であります。人間の行為の善悪問題でなく信仰の問題であります。

「往生は不定におもへばやがて不定なり。一

定とおもへば一定する事なり」

のご法語がそれです。「やがて」は直ちにという意味であります。往生できないと思う人は即ち往生できません。本願力によって往生できると信ずる人はそのまま、往生できるのです。

そこで阿弥陀さまを心から信仰することとは

「かの仏の本願は、いかなる罪人をもすてすただ名号をとらふ事一声までに、決定して往生すと、ふかくたのみて、すこしの疑ひもなきを申す也」と示されました。

俗に苦勞知らずの人間という言葉があります。苦勞したことの無い人は、もの事を深く察することができません。それと同じように反省する度合が浅い人は、強い信仰を得ることができません。この反省とは何をいうかといえ、申すまでもなく自分が凡夫であるということの反省であります。善導大師の「自身は現に是れ罪惡生死の凡夫」といわれた言葉の通り反省の深さにさい限がありません。

(村瀬秀雄)

正 僧 瑞 彦 内 簀

和 良 橋 高

(中外日報取締役)

大阪には昔から宗政界に大きな足跡を残した人が多かった。

大正から昭和にかけて、浄土宗の宗政を大きく動かしたのは大阪の郷俊定僧正であり、その郷僧正と共に乾順澄、簀内彦瑞という人たちも大阪が生んだ宗政界の大ものであるといえる。その外六花真哉僧正、前田聴典僧正などという、一心寺の歴代があるが、いずれにしてもその頃の大阪は宗政界では人物が競っていたようであった。

その一人簀内彦瑞僧正は大阪市天王寺区八丁目中寺町誓福寺の住

職であって、昭和十二年修行の知恩院の三上人遠忌のときは丁度執事長の要職にあったのである。

簀内僧正は鶴のように細く、そして背の高い人であったが、すこぶる童顔で、終始笑をふくんだ口もとは愛くるしかったものである。

この僧正は当時百万遍の法主であった林彦明大僧正との親交があつて、その頃、一宗の管長である山下現有門主が逝去して、そのあとの門主にということで郁邦随円黒谷法主と、百万遍の林彦明法主の二人の方を推せんする動きがあったときに、林彦明法主は一宗の管長は競争してまでなるものでないということとその辞表を提出することになったが、それをあずかったのがこの簀内僧正で、その辞表の扱いに苦心された逸話は老僧正の正義感を知る上にとっても興味あることである。なぜなら、林彦明法主の辞表を受理して宗務に提出すると、後任の法主となってくる。するとこの簀内僧正に落ちつく可能性があるので、簀内僧正は人の辞表を提出してそのあとで自分が推せんされることになり断るのになかなか苦勞されたのである。

わしは悪いことばかりして、法主になるようなよいことはしてません。それで断りますわと、例の大阪弁で法主の推せん者を困らせたりしたのである。

この簀内僧正が知恩院の執事長に新任すると、間もなくあのものすごい室戸台風が吹いたのである。

知恩院も相当な被害をうけてその修理にも巨額の費用を必要としたのであるが、昭和十二年の三上人の大遠忌の法要予算は門末会の議決を経たのがたしか三十五万円であったと記憶している。

三十五万円といっても、昭和十二年の頃である。今にしてみれば相当な予算である。また知恩院としてはおそらく背のびをしたいいわゆる精一ぱいの予算であったが、なんとそれが決定して間もなくの台風であって、大方丈の屋根には穴があき、檜葺の屋根はとんでしまったのである。

一時は遠忌の延期説までとび出したのであるが、簀内僧正は断固として延期せず、大遠忌の修行の促進を図ると共になんと大遠忌予算の三十五万円を、更に堂宇の修理と改築ということで八十五万円に増額したのである。

これをよう可決しない門末会ならわしが、先にやめる。

簀内僧正の決意は固く、遂に門末会を動かして見事八十五万円の予算を可決し、この遠忌修行に踏みきったのはこの執事長の信頼感の厚かったことによると思うのである。

この三上人の大遠忌は大盛況に終わったが募財は百万円を突破して、庫裡の新築をはじめ堂宇の大修理を見事に完成

したのである。

当時知恩院さんの百万円遠忌といわれて東西、本願寺も驚くほどの大遠忌が修行出来たのはこの簀内僧正の力であるといえるのである。

この簀内僧正はまことにやさしい人であった。またその声からうける感じもほんとうに柔和な方であった。めったにいやという顔もされなかったし、ことばの上にもそんなことばはなかったもので、いつでも後進を育てるということではなかなか骨を折られたのである。

時に親交あった林彦明法主のところに来られたのであるが当時わたしは林僧正の常修をしていたので、お二人の話を聞く座につらなだったのであるが、そのはなしたるや全くの漫談で、宗政のはなしなど一つもなく、ただ二人がにこにことして、世間話に、二・三時間を過ごされるということであつたが、この僧正は人の悪口を一切いわず、ただ暑い寒いのはなしを、たのしくすすめる真からの人情家のように思えて、青年の頃のわたしの心を捕らえた人であつた。終戦後間もなく上宮学園の落成法要の導師に杖をついて大阪府下の疎開の寺からわざわざ上阪されたとき、わたしをみて、まだ生きているわ。あんたも達者か。

と手を握られたあの感触が今もなお掌に残るような気がするのである。

東南アジア旅行記(七)

佐藤行信

(大正大学講師)

十一月二十八日

昨晚遅かったもので、起きたのが八時。それから、バケツ一っぱいの湯を貰い、顔を洗って朝食をすませてからバスで祇園精舎と舎衛城に向った。祇園精舎までは約三十分、並木のつづく美しい風景の道路であつた。

この祇園精舎は、舎衛城の南にあり、給孤独長者が敷地一ぱいに敷きつめた金貨を代償として祇陀太子から購入し、釈尊とその教団のために奉納した林苑(漢訳では祇樹給孤独園)に建てられたもので、釈尊はこの場所を非常に好まれ、二十四年間、雨期の安居のあいだだけを、ここで過されたと云われている。したがって、ここで説法されたお経は数多く、

中阿含百五十經のうち六十五、律藏三百五十のうち二百九十四が説かれ、阿弥陀經もここで説かれた。もとは七層の建物があつたと云うが、玄奘三藏法師が七世紀に訪れたころはすでに荒廃していたと伝えられる。しかし現在には発掘され、整理された一大公園となつている。そして昔の僧院の跡などよく判る。ここに現在中国の寺があり、老比丘が堂守りをしていた。この比丘英語は話さないが、中国語でなにか親しげに話しかけ団員、一人一人に握手してくる。このお坊さん、現在中印国境紛争以来、印度人は中国人を敵視するため町に出て買物も出来ないそうで、普段は人も尋ねて来ず自給自足で苦勞しているそうだ。そこに我々が尋ねたので大変喜んでくれたよ

うである。そのあと、舎衛城跡を見学した。ここは釈尊在世の時、波斯匿王並に琉璃王の都とした地である。ここも英語の案内板などありよく手が入っていた。それからまたレストハウスに帰り、昼食後荷物をまとめて、バスでゴンダ迄行つた。この道もなかなか美しい風景であつた。ゴンダですこし時間があつたので、ここで駅前の馬車に乗ってみたりした団員もいた。ゴンダより三時間程汽車に乗り、夜八時半ラクノウに到着した。ラクノウはこの地方の州の首都であり、歴史的にも有名なところである。我々はここで三日ぶりに御風呂に入る事が出来、まことにさっぱりした又、我々の泊ったカーターホテルのコツクは、日本と印度の間を往



(サヘート)

復する汽船のコックをやったとか云う人で、我々日本人の口にあうように料理をしてくれた。このような本格的なホテルに泊るのはベナレス以来であり、まことに快的であった。しかし食事は夜九時半であったため、あと荷物整理、手紙書きなどしたら、ベットに入るのが十一時半になってしまった。

十一月二十九日

今朝は七時に起き、八時に朝食となった。

ここまでカルカッタから、我々に同行してくれたマーキュリ・トラベルサービスのサガル氏が、ここでカルカッタに帰るため、我々としても感謝の粗品を贈り労をねぎらった。

印度で旅行するのに一番困難な地方を、このようにスムーズに旅行出来たのも、この人の御蔭であった。これからサガルさんは二週間日本航空の招待で日本に行くのだそうだ。

それから、我々は、車で飛行場に向った。ラクノウは時間の関係でどこも見物出来なかった。九時四十五分発のインデアンエアライン・コーボレイションでニューデリーに出発した。この国内飛行機は、飛行中は、最初から終り

まで禁煙で、飛行機もずいぶん古い型のヴァイカウントであった。ニューデリー迄は二時間程であったが、初めて印度大陸を上空から見



(ニューデリーのインドの門)

物出来、又、途中雨にも会い変化のある飛行であった。雨あがりのニューデリーに十一時四十五分到着した。ここでは、小生の弟と同期

に外務省に入った丸山君がおり、小生を出迎えてくれた。約二年ぶりの再会でなつかしかった。丸山氏が最初に云ったことは、我々の団体旅行社が、手ぎわよく、飛行場に車を用意させており、すぐホテルに行けるようにしておるのは珍しいとの事、これも日本旅行会の橋本氏と、マーキュリ・トラベル・サービス等の御蔭と感謝している。

さすが、印度連邦の首府、ニューデリーは他のいままでみた印度どの町よりも美しかった。又、ホテルもアシヨカホテル、このホテルも印度最高のホテルだそうで、なかなかりっぱだった。しかし現在東京に出来た新しいホテルを御覧になつて皆さんには、そう驚く程ではない。本日は午後から自由行動のため、ホテルで昼食の後休憩した。このホテルは、昼食時も食堂にはバンドが入り、軽音楽を聞きながら、バイキングスタイルの食事をする。さすがに印度は、ベジタリアンのバイキングもあった。ここは品数も多く食事もおいしく快的であった。又、観光客のようなアメリカ人始め、外国人も多く、国際的な感じのホテルであった。今日は午後五時に丸山君

が迎えに来てくれるまで、風呂に入ったり、ベットに横になったりして休んだ。夕方、丸山君の案内で、レストラン・ヨークと云う中華料理屋に食事に行った。途中ネール首相の官邸の門前を通ったが、内の感じは奥深く大であった。

このレストランも、バンドが入っており、食事をしながら踊ったり出来るようになっていた。しかし酒類は出さず、ただ食事とダンスを楽しむところで、我々の行っている時もアメリカ人の若い男女が夢中で踊っていた。小生は、丸山君と久しぶりに会い、時間のたつのも忘れる程であった。しかしこの中華料理は大変おいしかった。この丸山君の話では、ニユデリーはネール首相のおひざもと、特に酒類の販売はうるさいそうだ。小生の方は、しばらく日本の新聞も読んでいたので、ケネディ大統領暗殺事件や、日本の衆議員選挙の結果等を聞いた。それから、彼と一緒にホテルに帰り、ホテルならビールが飲めるので部屋にビールをとり、同室の鵜飼先生などと一緒に又、話し合った。その夜は十一時頃ベットに入った。なんと云っても異

国で知人に会うのは嬉しいものである。

十一月三十日



(クタブ・ミナール)

本日は一日中市内見物である。八時に朝食後、ガイドが迎えに来て車に分乗して町に出た。我々の泊っているホテルは、ニユデリー

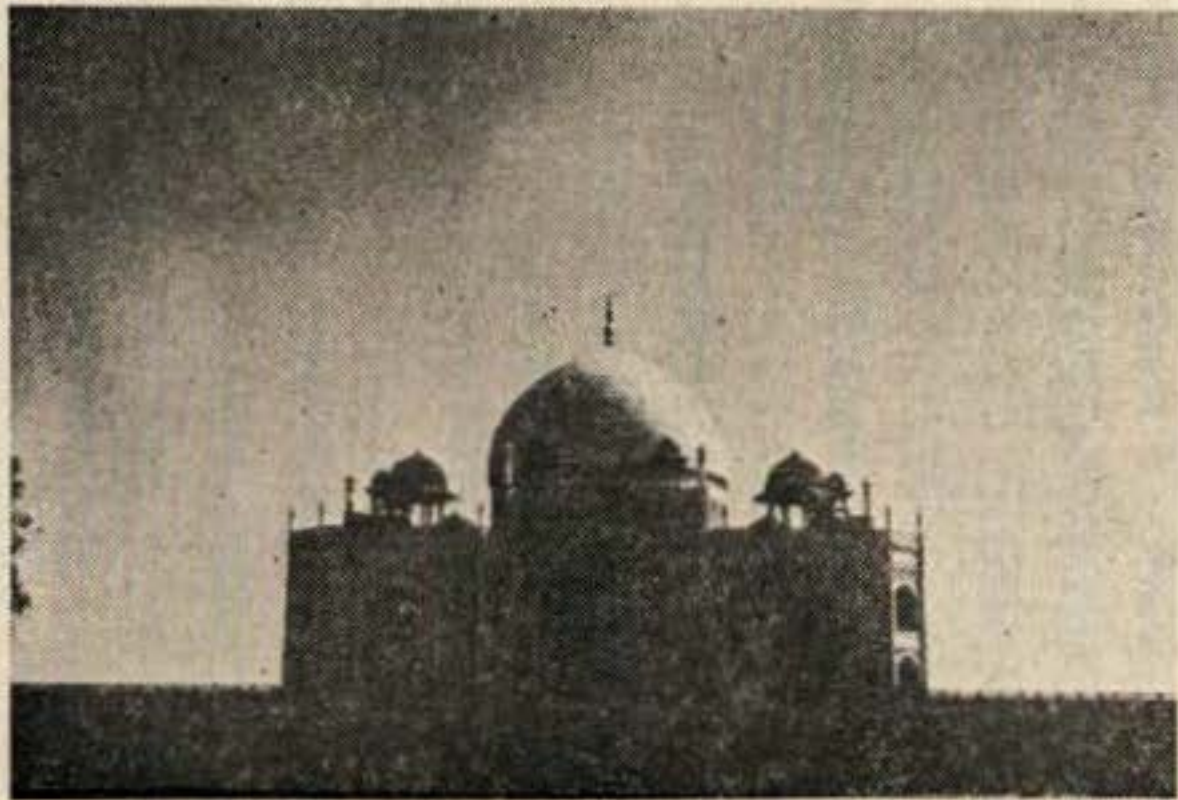
にあるが、このニユデリーは、英国王、ジョージ五世がインド総督、ハーディングに命じて、都市計画により建設されたそうで、広々とした街路が緑樹や芝生の広大な建物の間を貫いて走っている。全く英国風に設計された町である。まず最初に訪れたところは、クタブミナールであった。寺院は、十二世紀末のイスラム時代、クトゥブ・ウツ・デイン・アイバクがデリーを占領したときの記念に建立したもので、廃墟に残る石材の一つ一つにも、あるいは、ヒンズー風に、又は回教風に精細な彫刻が施してあって興味が深い。ここに有名なものが二つある。一つは直径40m、高さ10m地上67mある鉄柱にはチャンドラ王、紀元四〇〇年頃の勝利が記録されている。もう一つは、高い塔で、高さ33m、直径は2.6mもあり、頂上に登ればデリー市内の展望が美しい。ここをまず見学したあと、フューマンの墓に参詣した。墓と云っても美しい大理石で建てられた回教のお堂で、このお堂の中央に王の御霊室があり、周囲の薄壁の彫刻も優れている。次に今度は、印度の中央政府大通りを隔てて二分された、それぞれ大

ドームをなす堂々たる建物がある印度の心臓部、キングウエイ、ここは美しい大通りで、ムガル様式に設計された大統領官邸、国会議事堂等があるところを車から見物した。なおここまで行く途中、団地があったが、これは、役人の集団住宅地だそう。印度は、掘建小屋に住んでる人が多いようで、住宅難だろうに、役人だけが、特権を楽しんでいるようである。次に富豪ビルラが建てたと云うラクシュミナラン寺院に案内された。ここは中央にヒンズー教、両側にジャイナ教と仏教の仏殿があり印度の赤色砂石と白大理石の美しい建物であった。ここの中に入るのには靴をぬぐわけだが歩くところも、大理石の張りつめた床できれいにしてあった。これで午前中の見物は終り、ホテルに帰り昼食となった。

午後は二時頃から、まず印度独立の父、マハトマ・ガンジー廟、ラジガートに参詣した。ここはガンジスの支流、ジャムナ川の河口にある。ここは国家的な聖地になっており芝生の緑が美しいところで、印度人の尊敬を一身にあつめたガンジーの廟にふさわしかった。

た。

次は、今度旧市内デリーに入つて、レッドフォートをみに行つた。ここは旧市内第一の



(テュマン王の陵)

名所であり、アーチ形のラホール門は、赤色砂岩の城壁に連なつて赤色の大城壁をなしている。門を入ると、謁見の宮殿があり、この

内部は後壁にそつて玉座があり、柱と上部のアーチ形との調和がよくとれて壮麗をきわめている。又、レッドフォードの中に、デイワニ・イ・ハース宮殿があり、内部の内壁は寶石をちりばめ、その玉座の間は、ことに美しい。その他宮廷内の荘厳な回教寺院や、真珠寺、豊かに水をたたえた池、緑樹、草花の美しい美しさであつた。ただただムガル様式の建物の強さと精巧さ、ならびに風趣に感心させられた。

本日の最後は、旧市内、オールド・デリーを車の内から見物である。この市内見物は、云わば名所は、みな敗戦記念物で三千年前にさかのぼる。北西から攻め下つたアーリアン民族の遺跡、アフガニスタンから南下したムガル王朝の遺跡、シーク教の制覇それからイギリス侵略の遺跡と、丁度、印度の歴史そのままが名所としてある感じであつた。そのあとホテルに帰り夕食となった。夜は又、丸山君が尋ねて来てくれ、夕食のあとまた雑談の一時を過した。十二月二日の午後、アグラに向う事になっている。

茶道と歌道

性
禪

林 左馬衛

(宮内庁図書寮)

二月十五日チカクナルコロヲヒ、ヨミ
テツカハセル。

性 禪

イニシヘノワカレノニハニアワヌミハ
オクレテヌラススミゾメノソデ
ケガサジトオモフミノリノトモスレバ
ヨヲワタルハシトナルゾカナシキ

返

クモルヨニソラガクレスル月ナレバ
ヌラスソデニゾカゲハオツラム
ケガサジトヲモフ心ノアルキミハ

ヨヲイツルハシトナドカセザラム

已上、遣心和歌集

遣心和歌集は、梶尾高山寺開山明恵聖人の弟子高信が撰集した明恵上人歌集の前年を占める、聖人自作自撰の歌集である。高信は、この遣心和歌集につづけて、もとめうるに従って明恵の歌を録してゆき、先師の作品を集大成した次第を、明恵上人歌集の書中及び序に、のべている。

高信筆の原本は、かつて佐々木信綱先生の解説をそえ、コロタイプ版として公刊されているが、これによると、ここに掲げた部分はこの卷子本中両紙にわたることなく完全に一紙の上に書写されているから、もともと遣心和歌集の本文であったことが分明である。

大日本史料五編の第七巻、貞治元年正月十九日高辨（明恵）自寂の条下には、明恵に係ある史料が類聚されているが、この部分はそこにも、高弁と性禪という頭注を伴ってあらわれている。

性禪という人物は、尊卑分脈によると、坊門為通の子で、仁和寺の阿闍梨になった人で

ある。父為通が久寿元年六月十四日に三十一才で薨じているのをみると、明恵聖人よりは十八才以上年長でなければならぬ。祖父伊通は太政大臣になり、叔母皇子は近衛天皇の后となっているから、高貴な家柄を背景に持った僧であった。

この人が、僧としてどれほど偉大な人であったか、詳しいことは分っていないが、彼の偉大さが後世に跡を残したのは、実は他の人の栄光に姿まぎれてのことであった。逆説的でない方になるが、その故にこそ跡を誌すことができたのであって、そうした点が変わっているといえはいえる人である。

戦後コロタイプ版として刊行された、薪酬恩庵の自戒集（一休宗純の著作）の中に、この性禪の歌ハケガサジトVが、明恵上人詠歌として引用されている。歌は、冊子中余白となった半葉に、大きくひらがなで書かれている。原本をみていないので断言を控えなければならぬが、冊子中の余白ごとに誌された一休の奥書きがおなじくひらがなで書かれていて、その部分が一休自筆らしく思われるから、この部分も、恐らく一休の自筆なのでは

ないか、と思われる。

誤認者が一休宗純であつたかどうかは別としても、その誤認の出発点は、遣心和歌集自体であつたようだ。この歌が、明恵におくられていなかったならば、第一、明恵自身の作歌と誤認される事態は起らなかったろうし、また、明恵がその自撰歌集に採用することがなかったならば、後世に伝承されることもなかったものと思わなければならない。——性禪は、文学者としては、無く無名の歌よみであつたにすぎなかったのだ。

ところで、冒頭に引用した遣心和歌集最末尾の性禪高弁問答歌が、茶道史を考える上でみおとせないのは、このヘケガサシトVという歌が、千の利休および山の上の宗二によつて噛みしめられてしまったからである。しかし、その時も性禪は姿をみせることがなかったし、もっと意外なことには、その歌の中継者であつた明恵さえいつしか忘却されようとする動きの中にあつた。統群書類聚巻第五百六十九に収められた瓢庵山上宗二の茶器名物集には、左のごとくある。

慈禪和尚御歌二、

ケガサシト思フ御法ノ供スレバ

世ワタルハシトナルゾカナシキ

此歌ヲ、宗易老常ニ口吟ニテ候。世上末ノ世ニ成候テ、宗易ヲ始メ我人茶湯ヲ身過ニ仕事、口惜次第也。錯今閑事。禪宗之眼、可専也。

これは、茶器名物集の奥書きというべき部分の一部であるが、この段落の前後に禪話をめぐる口伝に関する文章があり、この歌自体も禪宗の眼をもつばら必要とするという話の引合いに出されているところからみて、歌の作者和尚は、当然禪僧として予想されるはこびになっている、と考えられる。従つて、この伝承によるならば、この歌は、かねてより禪に深かつた利休——もともと利休の茶を禪の茶として仰いでいた宗二、という線でかみしめられなければならない必要性を色濃く帯びていたようである。ここにとりあげた統群校定者の段落のわかち様などは、その可能性を一つの了解事項としてでなければ施しえないものである、といわなければならない。

桑田忠親氏は、この茶器名物集を検討され

これが山上宗二記という名称で伝写されていた書物の一異本であることを明らかにされた桑田氏によるならば、群書本における「慈禪」和尚は「慈鎮」和尚であり、又、すでに「錯今閑事」以下禪宗云々という部分を欠いた一本も、世に紹介されている。この紹介によるならば、かの群書本においてあたかも禪宗気分の中に埋没していたかにみえた歌は、ほぼ完全に禪宗の埒外に出てしまい、にわか

に天台宗の高僧と手をにぎつて、茶道界に君臨しようとする勢いをみせてくる。

高僧筆の遣心和歌集が、すでにこの歌の作者が性禪であることを証明し、また、今日までに判明している慈鎮の作歌にこの歌が存在しないことを考えると、茶道史が、この歌の伝承にあたつて、はなはだしい誤解を前提にしてしまつていたことは、明らかである。

このことは、山上宗二記の原本自体がはなはだしい思い違いの上にもものされたものであることを証明する。茶器名物集における慈禪和尚というのがもしまかりにすなわち性禪であるのだというのであるとしても、原本が慈鎮

もしくはそれにまぎれやすい草体の文字に転写されうる人名として表記されていたことは確実だから、少くとも原本に「性禪」と明記されていた気遣いだけは絶対でない、わけである。

慈鎮和尚は、歌通史の上では熟知の人であるが、決して積極的に茶道史に登場して来べき人ではない。また、利休の教養というものを考えてみても、この和尚の歌を「常に口吟」しなければならなかったほどの歴史的人格的必然性を予期することは、困難なようである——慈鎮和尚の場合は、いうなれば、誤って山上宗二記に顔を出したのであり、そうしたことから、偶然にも茶の湯に生きてしまった人であった、ということになるのではないかと思う。

歌が、かの天台宗の高僧の作でなく、また茶器名物集の暗示するとき禅僧のものでなく、さらに、かの華嚴宗の名知識の作品でもないとしても、後世愛唱されるためには、歌は、やはり、これら数多くの文化人によって、後援されつづけなければならなかった。それは、決して性禪の罪深さによるのである

まい。無名という業を負って文化史に生きなければならなかった男の、哀しい後世への生き方の影であった、とみなすべきものなのであろう。

利休は、そして宗二は、性禪を知らなかった。ただ、素朴に、この歌の内容に、彼らは同感し、傾倒したのであった。この歌に、彼らは現実生活の中で不当な屈辱感を予儀なくされている彼ら自身を見、また、全力かけて自分をぶつけていってもなんらの危なげすら感じさせない作品の確かさをみたのだった。この文盲者同志の師弟の間に交流しえた感情は、ほとんどただ、それだけであった。そこでは、すでに、作者がつまり誰なのかというようなややこしい知識上の問題は、いわばどうでもよくなっていたのである。

利休が、それ以上作者和尚性禪について調べてみても、どれほどのものを得ることができたかは疑問である。問題は、歌の内容が、彼ら文盲者のやみくもな荒々しい期待に答えることができるかどうかというところにしかなかった。作者性禪は、そうした教養社会からみるならばまことに当を得ない。あまりに

主観的な撰択眼をくぐりぬけ、あたかも毎日出会っているごく親しい人物なのでもあるかのように遇されることを得た、歌道史上稀な存在だった、といわなければならない。

時代は、一切の教養社会の權威が崩壊し、文盲者たち自身の手で再構成されなければならぬ日本文化の実態をあらわにみせていたその再構成の事業に着手するために、いわば自分自身をたたきつけるようにして消化することができる。そうした激しい鑑賞の姿勢に堪えうる歌が必要であった。利休は、自分が聞き覚えた歌の中にそれを模索し、遂に、この歌に辿りついたのであった。

ほくらは、利休の歌に関する境涯が、教養社会の眼からみてそれほど高級なものでなかったことを知っている。そして、この場合もその例外たりえないことを認めなければならぬ。しかし、その故にこそ利休の果しえたそして果さねばならなかった文化史的宿命の重さを、不当に評価すべきではない。

宗二の心をとらえていたものは、歌よりもまず、師の利休であった。その利休が「常に口吟」していたというだけで、歌の価値は絶

対的であつた。宗二が心から利休を尊敬しその口辺から洩れる片言隻句をすらのがさず孜孜記憶にとめようとした茶人であつたことは、今日、山上宗二記のどの一本を読んでも、今日、山上宗二記のどの一本を読んでも、ただけでも十分に察しがつくのであるが、その彼が、自分の先生の愛唱歌の作者を慈鎮もしくは慈璵にもっていつていることは、作者に対する誤解が利休においてすでに決定的であつたことを暗示しているのではないか、と思われる。

利休は、あるいは、明恵といおうとして、まちがえて慈鎮といつてしまったのかもしれない。しかし、そうした云いまちがいが起つたのは、もともと、明恵上人歌集を読みこなしていなかつたからで、すべてをまたぎきうろ覚えにまかせていたからなのである。

桐尾高山寺の開祖明恵聖人の名は、利休の幼少時には、すでに茶人の間に著名であつた筈だ。しかし、大茶人として大成した利休は茶祖としての明恵を意識しながら、客観的に追求することなく、すべてを直観と暗示に頼りすぎていたのであつた。彼にとって、明恵その人は、慈鎮と同じく、遠く点滅する文化

の星に過ぎなかつた。いうなれば、それは、どちらでもよかつたのであり、ただ過去の文化史上の偉人であることさえ確かならば、十分だつたのだ。

利休は、この歌が、もともと遣心和歌集の中において、明恵聖人から軽くつきはなされ返歌によつてたしなめられ、結果においてその安易な心境をたたきのめされた歌であることを知らなかつた。そして、つきはなすことによつてこの歌の価値を顕彰しようとした、明恵聖人の偉さを理解しえなかつた。それが野人利休の哀しい限界であつた。

歌そのものの内容に利休が同感した時、そこには、作者はなく、和歌そのもののもつ迫力だけがあつた————ということは、利休とその内容をむすんでくれた別の人格があつたことを物語るものではないかと思う。利休がこの歌を常に口吟し、さらに弟子に伝えるという熱の入れ方をあえてしたのは、その歌を利休に示した人格が、利休にとってかけがえのない人格であつたことを意味している。いかにも利休が達人があつたとしても、それは、誰の賛同もえられず過去から孤立して生きるこ

とを愛した、ということなのではない。彼には、彼なりに、彼の正しさを保証してくれる心のよすががあつた筈なのだ。

身辺の人々から重んぜられた利休は、必ずや人々を重んじた人であつたに違いない。また、門下に幾多の師匠思いな弟子をもつた利休は、その人自身師匠思いであり、道統を重んずる人であつたに違いない。彼の文化に対する主張は、すべて、その点に限界を持つ主張であつた。彼自身としてはいくらか文盲への傾きを持ち、広く知識を帰納するよりは、狭く知識を限つて深く吟味し演釈してゆくたちの生活哲学者だつた利休にとって、和歌文学の世界を直接再評価し撰択する任は、適当ではなかつた。性禪の歌に新しい生命をもちこみえたのが彼であつたとしても、その歌を彼に教えたのは、彼自身ではなかつた。

利休にこの歌を教えた人格は、おそらく、利休の茶の生命につながる人格であつたろう。そして、その生命を保証する人物の一人に利休の茶の師匠が存在したことも、動したいことであるように考えられてならない。たんなる歌人や僧侶の知識のままにつたえら

れたにしては利休の噛みしめ方が重い——、
そうぼくは思う。ぼくは、そこに、もしくは
その果に、この歌を明恵の作品と信じ誌した
一休宗純と、三条西実隆に日参して和歌を学
んだ利休の師武野紹鷗の影を認めたい、と思
う。

歌人としてあまり有名でなかった性禅は、
遣心和歌集もしくは遣心和歌集を中にふくむ
明恵上人歌集においてしか、歌の世界におけ
る自己を全うしえなかった人である。そして
そこにおいて、性禅は、明恵のわき役として
一度登場したにすぎない存在でしかなかった
た。この場合、明恵の歌の出来栄も、さし
てかんばしいものであるとは思えないのだが
心の位どりが僧侶として少くとも性禅より高
くすえられているため、その位どりにみすえ
られて、性禅の歌の位がいちじるしく低い位
置に設定されている、かの感が深い。

しかし、ぼくは、その真相を悟りえないに
もかわらず、この集中の他の贈答歌に比し
て明恵聖人からなんらの深い同感も儀礼的な
共感も与えられなかったかにみえるこの贈答
歌が、遣心和歌集の最末尾を飾っていること

に、若干異様な気配を感じざるを得ない。こ
の歌は、もしくはこの歌の贈答は、明恵にと
ってなにか心の底ふかくのこるものがあつた
のだ。その贈答の経過をめぐって、明恵の心
をとらえ去った歌の生命じみたものが、なに
かひらめいていた筈なのだ。

徒然草の作者がいみじくも的をついたよう
に、明恵聖人という人は、心の琴線にふれる
ことがあると、しばしば手放してとりみだし
てしまう、感受性のすぐれた高僧であつた。
性禅は、この二首の歌によって、とりみだし
た果てにすぐれた歌を詠むという状況に明恵
を追いやることには失敗したようだが、明恵
がいささか固くなって、持前の負けん気な気
性を露呈させるところへ追いこんでしまうこ
とに成功した、のではなかったろうか。明恵
の歌によって叱咤されたのは、性禅である以
上に明恵自身であつたような気配が、ここで
は、色濃く感ぜられるようだ。それが——、
性禅の歌の値打ちであつた。性禅は、みずか
らの負った深い傷を呈して、明恵と対決した
のだ。そして、明恵は、これを正面からうけ

とめようとしたのだ。性禅の歌は、明恵の歌
論として却廃忘記巻上に引かれた「心ノ実ニ
スギタルハ、クルシクモナキナリ」とする見
解につきあたり、この面から、聖人の心をや
や動揺させるところのあつた歌あると考えて
さして不都合ない作品であつた、というべき
ものではなからうか。

一休や紹鷗や利休がそれを知っていた、と
いうのではない。彼らは、明恵の名において
この歌を咀嚼していたにすぎなかった。宗二
に至っては、慈鎮と思いこむことがせい一杯
であつた。彼らに共通していたことは、一切
の教養を抜きにして、この歌を内容の面から
よしとした以外のことであつたのではない。

しかし、彼らの野性味に富んだ道の追求法
が、後世和歌史の一角を覆いえたことを否定
してはならない。古典文庫の中世近世道歌集
は、金春禪曲の長男七郎氏勝に柳生但馬守宗
厳がおくつたとする、兵法道歌一卷を収録し
た。その冒頭に、

世ヲワタルワザノナキユヘ兵法ヲ
カクレガトノミタノム身ゾウキ
とある。

空には宇宙船が放たれ、海には原子力潜水艦が航行し、オリンピック中継の電波が地球のまわりを一瞬にしてかけめぐれることを、ごく日常の文明と覚えならわされている現代人に対して、法然上人の宗教を理解させることは、なかなか難しい問題である。しかし、ともすれば科学に頼り、宗教心とは無縁になりがちな現代人であればこそ、今日を導き、明日の問題を解決するに足る原理を、信仰の中からつかみ出してやることが、宗教家に与えられた宿命的な義務といってもよいであろう。それが宗学の究極目的でもある。

諸戸素純氏の『法然上人の現代的理解』という著書も、この線にそって宗学を見直そうとしたもので、氏によれば「わが国宗教研究で、今まで不当に軽んぜられ、現在もつとも、その必要さが痛感されている学問」が宗学である。何となれば、明治以後の宗教研究で、新しい実証的な宗教的方法を採用した結果、その業績は高く評価すべきも一方、神学的方法論が忘れられていたためではないか。そこで、この二つを互に相補うも

のとして活用することによって、新しい信仰告白の学としての宗学を起さなければならぬ。それが著者の宗教学者らしい宗学研究の姿勢である。

こういう立場に立って、著者は宗祖法然上人の思想信仰を、現代という場で理解させようと努めている。

全十章のうち、いずれも上人の思想を追

紹介

諸戸素純著

『法然上人の現代的理解』

宝田正道

ながら、結は、現代人としても理解できるような念仏の意義を探索しているのであるが、私の興味深かったのは、例えば第二章、宗教心の開発と発展の項で、著者が、上人の宗教心は偶然な事情で開発されたと指摘している点である。普通、上人の出家の動機は、父の死や遺言によるといわれているが、むしろ「実は世間並みに、学問によって世に出よう

とするためではなかったろうか」と云っている点が面白い。昔も今も、人の子の出世欲に変わりはなく、著者のように解釈すれば、現代人にもよく上人出家の理由がくみとれるというものである。熊谷直実の出家が平教盛の首級をあげて世の無常を感じたという伝説の通りではなくて、鎌倉での所領地に関する訴訟で敗けたのが本当の理由であったように、とかく法然伝や宗史をいじくるものの注意すべき点は、粉飾で現実離れした史料を鵜呑みにしがちなことである。思想でも行実でも事実を曲げてはいけないうが、常に人間的な感覚でとらえ、それを現代人にも納得のゆく表現で伝えることこそ、古い酒を新しい革袋に盛る手法である。念仏の歴史は古く、時代とともに老いようが、その生命はいつまでも若く新しく脈打つことが必要である。『法然上人の現代的理解』は、宗学を現代に生かす一つの方法として、著者が宗教学的見地から情熱を傾けて訴える護法の叫びでもある、といえは太褻褻にすぎるであろうか。

知恩院宗学研究所発行・定価二〇〇—

家康と登誉天室 (二二)

鶴田湛泉

六

岡崎から留守居の家臣鳥井伊賀守が、汗馬を飛ばして義元討死の急を報じて来たのは、時に日が暮れ果ててからであった。

義元が討たれたという事実が判明した以上大高城の守備はもはや無用である。一刻も城に止まるべきではない。敵の包囲に逢わないうちに退去すべきと一決すると、伊奈の本多修理光忠は、

「父助太夫忠俊の手の者を率きつれて居ります故、殿は某が仕りまする」と申し出た。

変転つねない戦国の世とは云え、余りにも

早い時勢の推移に、老人の大久保忠俊など家臣の中には目頭を赤くしている者がいた。

家康は、召し出された浅井をかえりみて

「其方が先導となつてよく余の艱難を救い、無事虎口を脱することが出来た曉には、我が領地を裂いて必ず報いようぞ」とまで云わしめたほど、敵中突破は至難なことであつた。敵地深くに在った大高城の周辺は、勝ち誇った織田の勢力下にあつたからである。脱出の途中敵の大軍に襲われる憂いも十分あつたし、野武士や、乱破の襲撃に逢うことも覚悟しなければならなかつた。

夕方から、どんより曇っていたその夜は、

脱出に都合のよい星一つない闇空となつた。

改めて案内役に命じた浅井に、家康は更に

「先頭のそちは、長松明^{ダイゴウ}を馬上に捧げ持つて、四つ辻、岐れ道毎に打ち振れ、そうすれば後につづく者も心得て先の松明の燈に従つて道を失うこともあるまい。更に一丁間隔に騎馬の者が長松明を馬上に捧げて、後陣の兵の指揮に当れ。一盲衆盲を率く例え、一人道を違ふ時は、大勢必ず道に迷うものである。

又堀、沼、小川などある所に至つた時には、先手に進む騎馬一人長松明を捧げて、ここに難所があるぞ、危険な処ぞと次ぎつぎに教えで行け。ただし徒の者共は松明を持つことは

ならぬ。却って邪鬼にこそなるものぞ」

と委細に下知した。

こうして、敵はおろか足元にまで警戒しなければならなかった。

部隊の隊伍を整え終ると、更に相印相言葉を決めて教えた。これは万一闇夜に敵に逢った時、同志討ちを避けるための用心であった。闇にまぎれて城を出たが途中雨さえ降り出して、道は文目も分らぬ暗さとなり、唯一の道しるべである燈の松明さえ雨にたたかれて消され勝であつた。

この時、家康側近の大久保忠俊は、馬を部隊の前方に駆けさせ、或は後方に馳せ、声からして兵を部隊からはぐれさせぬよう叱咤し、度々乗り返して兵をまとめることに専念していた。忠俊の努力によって幸い一人の兵も道に迷うこともなく、池鯉鮒の駅に出ることが出来たのであつた。

而し池鯉鮒をすぎて間もなく、前方のくら闇の中におびただしい馬蹄のひびきが聞えて来たと思うと、部隊の先頭に立ち寒がった騎馬の武士が大音あげて、

「夜半、この道にかかるは誰なるぞ。これ

ぞ正しく今川の敗軍の散兵と覚えたり。一人もここを通すことは相ならぬ。撃って手柄に至してくれようぞ」

と呼ばわった。

その声に、スワと浅井六之助、馬をかけよせさつと松明をかざしあげ、その武士の顔をのぞきこんだ。

「おお、誰れかと思ひしに、半六どのか？」

かく申すは、刈屋の城主水野殿の家人、浅井六之助なるぞ」

「おお、浅井どのか？」

二人は、かねて顔見知の間柄であつたらしい。相手の武士も、この奇遇に驚いている容子であつた。

彼は刈屋辺の野武士の頭目であつたが、今川方の落武者を打ち留めて手柄にせんものゝ率きつれた手下の者、千余人を道に伏せて待ち構えていたのであつた。

浅井は、相手が野武士の半六と知ると、

「半六どの、何をかくそう。殿の仰せを蒙り織田殿の加勢に趣き、桶狭間の合戦に義元を目出度く打ち取り、只今三河勢の落ち行くを追討せよとの殿の嚴命によって道を急ぐも

の、されば、日頃その方とは昵懇の間なれども、無礼をすれば、容赦はならぬぞ」

と威高らかに呼ばわった。

肯き聞いて根が単純な野武士の半六、浅井の言葉を事実と思つて、

「ここへ来られしは味方なるぞ。其の方ら過ちあつては相ならぬぞ」

白刃をぬきつらねた手下の方へ、頸をしやくつて命じた。

半六の命に、彼等は直ちに道を左右に開いたので、家康等の隊伍は無事ここを通ることが出来た。

これより後は、道を妨ぐ者はなかった。

今村の郷まで来ると、浅井は家康に、

「これより先は岡崎領ゆえ、拙者ここにてお暇いただきます」

と慰撫に別れを告げた。

後のことであるが、浅井のこの時の案内の功を賞した家康は、彼に鞍置馬、太刀に所領地を添えて与えたという。

かくて、一難去つた家康は、悠々と郷里岡崎城へ帰ることが出来たろうか。

義元は岡崎城に、岡部、三浦、飯尾等の三將を入れて守らせてあったが、既に義元討死してしまつたとしても、直ちに岡崎へ戻ることは輕卒の感があると思つたのか、家康はひとまず大樹寺に入つて入城の時期を待つこととした。

大樹寺は家康の祖、松平親忠がたまたま三河に遊化していた勢誉上人（真蓮社愚底知恩院第廿三世）に帰依し浄土の法門をきき、よろこびの余り梵宇を建てて師を開山となし、大樹寺と号して寺領五百石を寄進したに始まる。かうして大樹寺は親忠以来、松平家五世の香華院であり近くは父広忠も葬られていた

廿一日、家康主従が大樹寺に入つたことを探知した信長勢は、早くも寺を囲み始めた。この時、大樹寺を訪ねたのは、家康初め石川家成、大久保忠俊、本多平八等主従十八騎であつたという。

守つていた大高城を捨てた時の家康勢は、相当の部隊であつたろうが、大樹寺に入つた時、何故僅か十八人であつたかの理由は明らかでない。或は岡崎城が末だ今川方の武將の管理下にあつたので直ちに城に入ることは、

どんな紛争が巻き起るかも知れなかつたし、それ故、ひとまず軍を解き、うちつづく合戦の労苦をねぎらうためにも、郷里の妻子や、親許へ帰したのかも知れない。

尚一説には、家康が大樹寺に入つたのは、三河に彼の家臣も加わるほどの旺盛な一向一揆が勃発した時、之を鎮圧しようとして戦つて利あらず、苦戦の末主従十八騎、身を以て難をさけ寺に逃れたとも云われている。

いかなる事態が起つた場合でも、沈着で且つ術策に長じていた家康ではあるが、よもや早急にここまで敵が追つて来るとは考えていなかったかも知れない。今はいさぎよく討つて出て斬り死するか、祖先の墓前で切腹するか、いずれかを選ばねばならぬ事態に立ち至つた。大樹寺を訪れたことは、家康としては一代の大きな誤算であつたか。

大樹寺の住持、登誉上人の前に端坐している家康主従の顔は、いずれも沈淪としている。登誉上人（信蓮社、天正二年六月十七日寂）は天室と号し、相州小田原の人と云うのみで姓氏は明らかでない。幼少の時に出家し、志を立て、浄土の教を布き、衆生を済度するこ

とを己の大任としていた。かつて洛中の一心院（第四世）に住し、又、下桂に往生院を開き其の後大樹寺に住した。性質至つて豪快、風貌魁偉で奇相があつた上、大力無雙であつたという。その上雄略もあり、道操も堅固な傑僧であつた。

登誉上人は、おもむろに口を開いて、「かかる時こそ男兒たるべきものまさに死中に生を求めらるべし。居ながらどうして恥辱を受けてよいものか。我が檀越の危難に逢わるるは、亦我が法門の厄に係つていゝともいうべきもの……」

天室のいうように、今は家康一個人の問題ではなかつた。寺に火をかけて焼かれるかも知れない恐れも十分あつた。寺を焼かれると浄土の布教も一時頓挫するわけである。

敵の重囲に陥ち入つた今は、袋の中の鼠も同様であつた。これで家康の生涯も終りかと思つと、未だ頑是ない一子三郎信康や妻の顔が臉に浮ぶ。従うものは、いずれも腹の底から信じ切つてゐる重臣たちである。大切な家人をむざむざこのまま殺してなるものか、さすがの家康も焦慮の思いが、胸一杯にひろが

ってくる。

早やくも日は暮れて、室には燭台が運ばれていった。

天室は、家康に向つて、

「御若年の昔より数度の軍に向わせられたが、その時、敵にただ勝ちたいとのみ勇み給うたか、それとも、何のわけもなく、一筋に向う敵を洩らさず切り払わんとのお心でござったか、この二つの境地、いずれを先にし給われたか」

ときいた。

家康は言下に

「これこそ、武士たるもの、常の志にて、更に珍らしからぬこと、何故、こと新しく尋ね給うか」

武士たるもの、常識を事あたらしくきき始める天室の言葉を解しかねてききかえした。

「さればおたずね申そう。では敵を討ち亡はして何の為にかし給う？」

「その心は、武威を盛んにして敵を討ち城を乗り取るときは、その領地即ち帰伏いたしまする。これ小分の勝でござる。大度の武將はその計画も大にして為すことも亦大でござれ

は、勝つときは大国の主となつて、富四海にわたり、威を世上に振うことが出来まする」家康が、若者らしく凜然として答える言葉を、大久保忠俊は、目を細めて聞いている。

「富、四海にわたり、威を振って何の為にされまする」

天室は、烈しくきき返した。

家康は、胸をそらしてこう答えた。

「而るときは、その家を興し、父母あればもとより、亡きといえどもその名を輝かし、その身は名を後代に止め、栄華を子孫に伝えし人、古今珍らしくはありませぬ。されば、これこそ、武功の大なるものにございませぬか？」

天室は、家康にびたりと視線をすえて、その小さい量見をあわれむように、

「身に貯うる徳を以って万民を司る人は、その栄も累代に及んで久しくはござるが、ただ武力の強盛を振うて人に勝つときは、その勝利を保つこと久しからずして、又人に亡はされます。されば、幸福は天より受くるを以って第一と致しまする。ただ計略のみにて討ち従えし者は、幾程もならずして衰うもの。

これ非情の武力にて、云はば劫賊でござるかかる愚かなる心は、全て貪りの心より起り来るもの。国郡を従えて一旦富をなし栄華を極むと云え、忽ち死に赴く時は、やがて悪趣に入りて恥めを受け、その迷魂限りなき苦を受くるは、必然の道理にて免るることは出来ませぬ」

天室にこう説きつけられて、家康はギリと胸にこたえ迷い初めて来た。

「敵を打ち亡ぼしては、その所領を得、又次第に領地をふやして威を示したときは武士の道でござれば、その計略、軍理を常に心がけて勝たんことを旨といたしますれば、このことのみに心を傾けて仏法後世の用意については疎きことにございます故、当来は余義なきことと存じます。されば、この点、上人の御教示を承りたいと存じまする」家康は低頭すると、真摯な面持でたずねずにはいられなくなった。

八

天室は形を改め、きびしい語調で淳々と説き初めた。

「世上の武士をすべて劫賊と申すのではござ

らぬ。元來、その所作には善惡は待り申さず。只その人の心を申す。若しその心、法に適う時は、日夜に刀刃を振って殺断すともいささかも惡業にあらず。又、常に仏の經典を誦し、昼夜に念仏仕るとも、これを善業とは云いませぬ。ただ方寸の一法にごさる。この義理を會得すれば、武士のなすところは、すべて菩薩の業に違ふことなく、慈悲の行法聖者の善巧方便ともなり申す。されば古人の語に『天下は一人の天下にあらずして、天下の天下なり』と云います。されども、天下に於てそのふさわしき主君の司なりときは、万民ほしいままに行いて争乱止むことなし、而るに主君、天下を我物となし榮華を極めんために庶民を貪り苦しむときは國人主君を疎み惡むに至ります。若し主君、聖道を行ひ民を憐み、神仏を尊崇し道行なわる、時は、その仁德四方に至るを以て怨敵更にありませぬ。人君たる者は、天地の心を体して、よく万民の心を推し、老人癯疾の者までも哀愍するときは、何を以て背き怨む者がありましようぞ。若しその聖道に背きて士は逆心となし、民は欲心をほしきままにして、その惡

はびこり世を騒がし乱をなす時にも、かの慈悲の道破ると思つてそのままに捨て置くときは、その乱いよいよ盛んになり行くものにござれば、かかる時こそ、慈悲の心は更に捨てませぬと、之を見て忍ぶに止むことを得ず、或は言葉を以て戒めなどすれど、かの惡徒その下命に従わざるときは、速にこれをこらしめ、或は流刑に処し、又は殺伐することはなすべき定まれる法にして、これまさしく殺を以て殺を咎むる所以、即ち菩薩の行にして慈悲の一行にごさる。拙納、今、恐れながら公に示し奉るべし。逆乱の苦難を払い向う所の諸勢をして正道に帰せしめ給い國家安泰にして、甲冑の緒を解き、弓を袋にしたまわんこと、ただ公の御心にごさる。海内錯乱するときは、万民明君の出現を思ふこと赤子の慈母を慕う如きもの。そもそも先に申し上げし聖道の道を行なわせ給いなば、御運の開かせ給わんこと更に怪みござらぬ。兵具取り國郡安隱ましますさんには、平常に専ら浄土往生の御心を起させ給わんこと第一。第二には、諸士をめぐみ民を憐み給うべし。公は御先君より代々仏教を信じさせ給い、わけて浄土の

法門に帰依まします。拙納、今當宗の法意を申し上ぐれば、浄土の法門、信を以て要といたします。死なば浄土に生れ、生きては勝利を得ん。死は素より期するところ、生も亦幸なりとして憂いの心なく、一に仏力に任せ、兵を用いること進退皆共に時のよろしきに従うて自ら意に計り度らず心慈悲に住し、口に仏号を唱えて余念を雜えず、單刀直刀するときは、強敵の長槍、大劔といえども何程のことがござろう」

熱を帯びた天室の言々句々は、家康の心を大きくゆさぶり動かして行つた。並居る家臣も固唾を呑んで、一言一句もききもらすまいときき入っていた。

「公は、民衆の苦患を救う救世の聖將となることに心がけられよ」

天室は、家康の目をじっとみつめながら、心から祈るように云つた。

家康にも、今の義も光りもない乱世を、一日も早く楽土にしたいとの一つの悲願に似た希いが勃然として湧いて來ていた。

天室の教訓を全身で感じとつた家康は、双眸を輝かして、

「武とは戈を止めるを本義とすとお教え、この家康骨肉にしみてございます。これからは、大きな誠の戦を致しようございまする」

狭い視野から豁然脱け出たと思われる家康の言葉に、天室は快心の笑をほほに一杯たたえて、

「拙納も、その言葉を承って安堵いたしました」

家臣等も、感動のあまり目を真赤にしていた。

天室は、おもむろに十念を授けると、家康等は恭しく受けて称名を唱えた。

「なみあみだぶつ、……南無阿弥陀仏——」

と十度唱える一念一念に、称名のうちにも、将来の運命を開こうとする真摯な祈りがこめられているふうであった。

家康は、これまで経験したこともないおちついた新しい力が、胸中にむずむずと湧いて来るのであった。

念死念仏とは、死を凝視することによって行き詰った局面を打解し切り抜いて行くことにあるという浄土宗の教えの核心に、家康も

ふれて来たものらしい。

この時の天室の訓戒は、後年の家康の思想形成の上に、重大な影響を与えたと思われるほど貴重なものであった。

九

明けては廿二日の払曉、大樹寺の廻廊に武器に身を固めて立った家康は、庭に片膝ついて控えている家臣を眺め渡し、

「ウム、今日は家康にとって新しい生涯の仕事の手始めになるぞ、皆の者、覚悟はよいか」

莞爾としてうながした。

「ハハッ」

ニコッと互に見交す家臣の顔々は、既に意気軒昂たるものがあった。

家康の後に控えている近侍の手に、白布に筆太く「厭離穢土、欣求浄土」と墨痕あざやかに、天室が筆を振ってしたためて作った旗が、家康の新らしい八字の旗印が、しっかりと握りしめられていた。

「日頃、養い置きましたる寺僧等も、御加勢仕ろう」

天室の好意ある言葉に、家康は、

「恭う、存じまする」

と目頭を熱くして、心から謝した。

数多の寺僧も法衣を脱いで一度び甲冑に身を固めると、いずれも屈強なつわものと変った。

既にこの時、大樹寺の周囲は織田勢が幾重にも取り囲んでいる様子であった。

門外では敵兵が門内に打ち入ろうと、門扉を押し開こうとしてひしめいている。しかし門が甚が頑丈に作られているのでピクともしない。

寺僧中に祖同という六十人力あると噂された勇悍な豪僧がいた。身にいかめしい甲冑をよろい大刀を帯びた馬上の彼は、

「いざ、一番槍は、この祖同が！」

家康に会釈して鞭を鳴らすと、砂煙をたて寺門目ざして駆け出した。

見る間に馬を乗りすてた祖同、門扉に走りより強刀を抜き放って渾身の力をこめ、

「エイワ！」

破れるような声で、樺の門に一刀をあびせた。さしもの頑丈な門も、真つ二つに切断されたと同時に寺僧は門扉をギイツと重いきし

みを立て、左右に開いた。それを潮に、敵兵は門内に霧崩れ込んで来ようとした。

ひらり馬の背にまたがった祖同、馬を逆か立て躍り出ると、強刀を振りかざし阿修羅のようにあばれ廻り、敵の幾人かは馬足にかけられなぎ倒されて行った。

それまで、じっと期を計っていた精悍な武将のような面がまえの天室、

「それっ！」

と一劔を横に振って号令した。

声に応じて家康の麾下始め大樹寺の寺僧等我れおくれじて白刃をかざして、ウワッとい齊に突撃したのであった。

追うもの追われるもの、一瞬にして大樹寺の聖地の内外は激斗の巷と化した。

家康の家臣はもとより寺僧等も、既に死を恐れてはいなかった。文字通り一騎当千の勢で、敵にぶっつかって行った。

日頃から武士を募り集めていたと云われる天室には、兵略の心得もあったらしい。この合戦のとき、天室が作戦し、寺僧を指揮する態度は、僧と云うよりは殆んど戦いなれた宿のようこゝであつたといわれている。

家康主従を無事脱出さすために寺僧がいか手強い敵に向つて、身も捨て勇戦激斗したかは、この時、寺僧が七十八人も討たれたことによつても推察せられる。

寺僧と力を併せてよく戦い敵の包围を破つてあやうく危地を脱することが出来た家康主従は、今川方から使わされていた城代等が既に駿府に退散してしまつていたので、無事岡崎の地に凱旋することが出来たのであった。

思えば、三才のとき母が離別となり、六才の時、今川義元の許へ人質となつて送られる途路、信長の父織田信秀の捕虜となつて尾張へ伴い行かれ、八才のとき父広忠が他界したので一時岡崎へ帰ることを許されたが、更に義元の人質となつて駿府に赴かねばならなかつたほど酷薄な人生をつぶさに味つて来た家康も、ここに始めて長い人質の生活を脱して、晴れて、郷里岡崎城の主となることが出来たのであった。

時に家康十九才永祿三年五月廿三日のことであつた。

年末・年始の施本 仏教の生活

A 5版・16頁 一部 20円

50部以上一部 12円 実費

内容

- ・新年頭に仏法ありや
- ・親と子のきずなとは何か
- ・仏教の生活質問帳
- ・日本の正月、鼓と羽子板俳句
- ・良寛のうた
- ・忌日早見表
- ・すみません
- ・笑いばなし
- ・仏典のこころ、父母恩重經
- ・信の風光

一家そろって楽しく、信仰の芽ばえとなる施本です。

発行所

東京都文京区湯島三組町十三

仏教書肆 中山書房

振替 東京一八〇三二八
電話(831) 八四九四

亡靈について

樋口亮栄

(大正大学主事)

私はお化けについて研究して見た訳でないが曾って体験経験した事について述べてみたい。

それは私が今の自坊に住職した頃の出来ごとである。私は大正十一年七月に現在の寺に参り、翌大正十二年四月住職の任命を受け現在に至って居ります。古老の檀徒総代等より聞く所に依れば明治四十二年六月桑門と云う御老師遷化されて私が参るまで十三年間に四名の住職が代り、無住時代が約二年間余であつて寺は相当に荒廃されて、特に二年間も無住であつた為かなりさむしい荒寺であつた。

或る晩のこと真夜中午前二時頃夢うつつの中に、お堂の隅、庫裏の片隅で幾人かずつ、こそこそと話しているけはいがするので、よく見ると、人間の話し声の様であつて而も人

間の話ではない、大きさも人間位で、人間の姿の様で人間とは違う、体全体の色は全部ねずみ色一色で、人間の様な足も手もなく、顔らしい顔はあつて誠にうす気味悪いだけで餓鬼の様な恐ろしい様相ではない、こちらにも別に悪いことをして居らないので特に恐ろしいとは思ひなかつた、別に逃げようともしない、よく考えて見るとこれが所謂、亡霊かと思われた。こんな事は今は忘れたが二回や三回はあつた。之れとは別にある夜中に台所でとんとんと音がするので起きて、薄暗い電気をつけて見ると之れは確かにむじなであつて縁の下へ玄関の戸のすき間からこそこそと逃げて行く事数回一晩に続いた。こんな事も何日かあつた。猫より稍々大きく胴体は少々細長くやはりねずみ色一色であつた。それは夕食の終つた鉄鍋のふたの上へおいた木のおしやも

じをたたき中に残つて居るおかずをふたとつて食べる為である事が判つた。又ある時はてんらしき動物が薄闇をついて、萱葺の屋根を飛んで行くのを見た。

こんなことは総て大正年間の住職したばかりの未だ大学生で大学へ通つて居る頃の事であつた。前者は二年間程無住であつた時の亡霊であつたと思われる。その後は全くこの様な事はなくなり、逆に昨年三十八年一月七日には珍らしくも七福神が現われた初夢を見た。今年は何が起るかと思ひが氣でなかつたが。三月になつて本堂へ水引一張の奉納があり次で木蓮奉金の台付一對塔婆建て一基などがそれぞれ別々の施主で奉納があり、金額にして大凡百万円以上のものが本尊様へ奉納された事に依つて初夢がはれた。

亡霊の現われた頃は何となく暗く陰氣であつたが、最近はずつかり明るく感ずる様になつた事は参詣者一同の語られる通りである。亡霊の現われなくなった事は平素の經典読誦の功德の現れと深く信じている。

当時は四〇世帯の高津村久本であつたが、今では千三百戸の川崎市久本と時は移つた。

信仰の手びき (三)

— 選択集ものがたり —

宮 林 昭 彦

(大正大学助教授)

○

一般に「選択集」といわれていますが、正式には「選択本願念仏集」というのであります。これは法然上人が六十六才のとき、即ち建久九年に撰述されたものであり、浄土宗の開宗宣言であって、日本仏教にあたえた影響は、はかりしれないほど大きいものであります。

この本がしたためられる前、すなわち法然上人が病いに引き籠っておられたときのことですが、法然上人の外護者であられ、念仏の篤信者であった前関白、九条兼実公が、このことをいたく心配されました。やがて、法然上人が恢復されたので、使いのものを遣わして引きこもっておられるうちに「お形見に浄土の要文を集めて給うべし」と懇請されたのであります。

そこで、法然上人は弟子の安樂房や、真観房などに執筆させて、できあがったものが、この書集であります。選択集の

末尾に「しかして今、図らざるにおおせを蒙り、辞謝するにところなし」といわれているのは、この事を指しているのでありましょう。

しかし、この選択集が述作されても、法然上人在世中に公表されませんでした。それは、旧仏教からの圧迫や誤解を避けるためであって、これも九条兼実公のふかい配慮からでたものであります。この年に、門弟の浄土宗の二祖であられる聖光房辨阿に授けられ、また元久元年には、長樂寺隆寛にさずけて写つさせ、ついで、勢観、証空、親鸞などの各師にも授けられました。しかし「源空在生の間は、秘して他見に及ぶべからず」として、刊行されなかったのであります。

選択集が開版されましたのは、建暦二年がはじめてで、法然上人がお亡くなりになられた年でありました。

この書物が公刊されますと、旧仏教系のおおくの学者たちによって誹謗したり論難されたのであります。三井寺の公胤

とか、梅尾の高弁らは大いにこの集を破斥し、定照は嘉祿三年に、ついに朝廷に訴えて、選択集を禁止させたばかりでなく、版木を焼きすてさせたほどでありました。

それほどに、この選択集が、当時の思想界、仏教界にあたえた影響は大きかったのであります。

○

選択集の説いているところは、きわめて簡明直截であります。ほかの祖師がたの論書のなかには、複雑で難解なものも非常に多いのですが、それにくらべると、この書は、全仏教の簡素化、単純化、というより純粹化をはかっており、ただ一すじに念仏して、浄土に往生せよ、と説いているだけであります。それは、全仏教を「南無阿弥陀仏」の口称の一行にしぼっていったのです。

選択とは、選取と選捨であって、仏教のなかから、必要でないもの、適当でないものを選びすてて、口称名号の一行だけを選びとっていくのであります。

この書物は、十六章段から成りたっておりますが、いまはこのうちから浄土の教えの大切な問題をいくつかとりあげてその手びきといたしたいと思ひます。

○

まず、はじめに「選択本願念仏集」という標題は、いった

いなにを示すのでありましょうか。

それは、無量寿經に説くところの、法蔵菩薩が諸行のなかから、衆生をして極樂に往生させるために、選択せられた本願の称名念仏すなわち、南無阿弥陀仏ということでありまゝす。ただの念仏というだけではまだ言いたらず、法蔵菩薩が選択した本願の念仏ということでありまゝす。

選択した本願の念仏とはどういうことでありまゝしょうか。經典はつぎのようにものがたっています。

むかし、世自在王仏が世にましましたころ一人の国王があつて、その仏の説法を聞いて発心し、国をすて王位をすてて沙門となり、法蔵比丘と名のつたのであります。そして、仏のもとに詣でて、いかなるきびしい修行であらうとも、必ずなし遂げて仏となり、理想の仏国を築いて、苦しみ悩む一切の衆生を救いとしてさしあげたいとおもひます。それには、いかなる仏国を建設したらよいのでありまゝしょうかと、み仏にたずねました。み仏は、二百一十億という多くの諸仏の国々のよいところ、悪いところを見せてくださつて、仏国土建設の参考をお示しくださしました。法蔵比丘は、五劫というながい間、考へて、それらの国々のよいところを悉く摂取して、理想国土建設の計画をお立てになつたのであります。

そして、再びみ仏のもとにいたつて、それらの計画にした

がって仏国土をつくりあげるために、厳しい修行をして仏と
なつて、かならず一切の衆生を救おうと誓われたのでありま
した。それは、世に超えた誓いであります。

仏国土を建設するための誓いは四十八ヶ条あります。これ
は、法蔵菩薩の四十八願といわれますが、その中でも第十八
願の念仏往生の願に、法蔵菩薩の誓願が端的に卒直に表わさ
れていますので、これを本願の中心とみるのであります。そ
れは、

「我れ仏となつたならば、至心に信願して、我が国に生れよ
う願つて、十念するならば、必ず生れさせてやろう」
という誓願であります。

その後、法蔵菩薩はながい間の修行に報いられて、み仏と
なつて現に西方にましますのであります。それが「阿彌陀
仏」です。ですから、もし衆生あつて、心から阿彌陀仏のみ
名をよぶならば、必ずその国に生まれることができるので
す。それは、本願によって約束されたことがあるからであり
ます。

以上が、無量寿經に説かれている本願の説話であります
が、この第十八願が、本願の中心となることは、ここに絶体
者から、相対的な存在である人間に対して、生きた働きか
け、よびかけが、もっともよく表わされている、ということ

を示すものでありましょう。

選択本願念仏は、法蔵菩薩が修行のときに諸善万行のなか
から選びとられた、衆生済度のための、約束の念仏、という
ことであります。

○

つぎに、法然上人は全仏教のなかから、口称念仏の一行を
選び出していく過程をあきらかにしておられます。

お釈迦さま一代の聖教のなかから、聖道門をすてて浄土門
に帰し、浄土門のなかでは、雑行を捨てて正行に帰し、正行
の中では正助の二行を区別して、正定業を専らにして、助業
を傍らとするのであります。こうして、最後に、称名正行を
もつて、仏の本願に順応した極楽往生の唯一の行として選ぶ
のであります。

しからは、聖道門をすてて、浄土門に帰する、その根本に
あるものはなんでありましょうか。

それは、時代に相応した歴史観と人間探求ということがで
きましよう。聖道の諸教は、いかにすぐれた教えであるとい
つても、お釈迦さまが亡くなられて遙遠な現在においては、
なかなか実践しがたいことであります。

いまは、末法といわれ、五濁の世であります。教主をはな
れるにしたがつて、歴史は悪世になっていきます。浄土教の

根底には、独特の宗教的な歴史把握がよこたわっており、また、それに応じて、切実な人間の実存の反省がおこなわれて現にあるがままの人間を追求して、罪惡生死の凡夫、五逆十惡の凡夫、愚痴の凡夫として見きわめるのであります。

それは、あるべき理想の人間の把握ではなくて、現にあるがままの現実態の人間への目醒めでありましょう。浄土教に帰するという決意は、こういう自己のいつわりない反省から生まれるのであります。

このように、聖浄二門にわけて、浄土門に帰したのでありますから、当然に浄土宗正依の經典が定められることになりそれを三經一論とされたのであります。それがさきに述べました浄土三部經と、天親菩薩の往生論とであります。

○

さらに、浄土門のなかで、雜行と正行とを區別して、雜行を捨てて正行をえらび取るのであります。それは、修行の種類を區別して、往生極樂のために必要な行を取り、 unnecessary 行を捨てるということであります。正行とは、一心に専ら三部經を読むこと（読誦）一心に専ら極樂のみ仏と国土の有様をおもいうかべること（觀察）一心に専らかのみ仏を礼すること（礼拝）一心に専らかのみ仏の名を称えること、（称名）一心に専らかのみ仏を讚歎供養すること、の五種類であ

ります。これ以外の行は、みな雜行とされます。

この五種の正行の中で、さらに、正定業と助業とが分けられます。正定業とは、善導大師の「觀經疏」によって名づけられたもので、觀經疏には、

「一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥に、時節の久近を問わず、念々に捨てざるを、正定業と名づける、かのみ仏の本願に順ずるが故に」

とあります。法然上人は、長いあいだ骨を刻み身を削ぐような研究と苦しい修行とのすえに、ついに善導大師のこの文に行きあたり余行をすてて一向専修に帰したのであります。

こうして、称名念仏が正定業として選取されたのであります。すが、なに故にひとり称名念仏をもって正定業とされたか、というと「彼の仏願に順ずるが故に」として、称名念仏は仏の本願の行であるから、これを修すればかの仏願に乗じて必ず往生を得るのである、と説明しているのであります。まことに、「願彼仏願故」は、浄土宗のよりどころであり、根本の信条であります。

この「故に」の文字はまことの信仰の世界のおく深さを示すものといえましょう。

○

浄土教のおしえは、安心、起行、作業として組織されてい

ます。安心とは、念仏行者の心のもち方、心がまえ、をいうのです。また、起行は、実践的な修行をいい、作業は五種類の正行の修し方をいうのであります。このおしえは、選択集において基礎づけられているのですが、そのなか、思想的な内容をもつのは、安心の三つの心のもち方でありま。

三心とは、一には、まごころ、真実の心（至誠心）であります。信仰にとって、まごころが必要なことは、いまさら言うまでもありません。二に、深く信ずる心（深心）であります。なにを深く信ずるか、といいますが、それに二つの面があります。一つは信機といって、機根の無力さを信ずることです。人間の現にあるそのままの姿を如実にみきわめて、自身は煩惱具足の凡夫であり、み仏の本願の救済力によらなければ、常に流転して、永遠に人生の苦しみよりぬけでることができない、とみきわめることであります。法然上人は、ありのままの人間の見方を、善導大師からそっくりうけつがれたのです。

つぎに、深く信ずる心の第二の面は、信法ということでもあります。それは、阿弥陀仏の本願によって、念仏を称えるものは、必ず救済される、と深く信じて疑わないことであります。これも善導大師の「決定して深く信ぜよ、かの阿弥陀仏、四十八願をもって衆

生を摂取したまうこと疑いなくおもんばかりなし、かの願力に乗じて定んで往生を得」

という文によっているのであります。ただし善導大師の信法は阿弥陀仏の本願ばかりでなく、お釈迦さまのおしえ、十方諸仏の証誠をも信ずることまでもふくめているのです。

三には、一切の善い行いを、まごころをもって回向して極楽へ生れたいと願ひ、極楽に生れたならば、そこで仏となりて大慈悲として、再びこの世に還って、人生苦に悩む衆生を救済したいと願う心（回向発心願）であります。いいかえますと、それは、自分も人もよりよき真実と慈悲の世界に生きたいと願う心ともいえましよう。

○

およそ信仰は、決して信仰に入ったからといって、そのままとどまるものではありません。無限にその向上を希念していくものであります。それは、私たちが「無量寿」をねがうとともに、無限にのびゆく「無量光」をもとめているからであります。ゆえに、念仏称名は一生涯を通じておこなうことが大切であります。うやまい（恭敬修）念仏を中心として（無余修）たえまなく（無間修）一生涯を通じて（長時修）の実践過程のなかに、私たちは、実人生の在り方と、安らかな潤いを味得することができるのであります。

編集後記

▽今年も残り少なくなつて来た。なんといっても、オリンピックが盛大に無事終了したことは喜ばしい。世界が一つになつて、あのよ
うな気持でやつて行つたら地球は平和であるだろう。
▽浄土宗も合同後の新宗会選挙が終了、本格的な新生の段階に入ることとなつた
今年を終るにあたり、浄土信仰の益々高揚することを願うや切である。

▽十一月は学会の月であるが、大正大学では浄土教学大会が、十一、十二両日にわたつて盛大に行われた。とくにシンポジウムでは、「浄土教の末法観」「寺と檀家の在り方」のテーマで真剣な討議が行われた。
▽池田総理は、かねて国立ガンセンターに入院加療中であつたが「前ガン症状」との診断が下り、オリンピ

ック終了後に辞任した。後継総理には華党一致とかで佐藤栄作氏が指名された。米価の引き上げ、公共料金の解禁等、値上りムードの高い昨今に対し、経済問題を特によろしく願いたい。
▽史上最大の、数々の話題を投げかけた東京オリンピックも終り、パラリンピックも今、終幕した。下半身のマヒとたたかい、遂にスボーツまで自ら行う。この精神力には襟を正して敬意を表したい。

▽オリンピック記念切手や記念銀貨の発売に関しては新聞紙上を賑わしたが、かく云う小生も記念銀貨の第一回目交換にはP・Rの不徹底もあつてか遅よく入手することが出来た。その後千円銀貨が四千円だの六千円だのとの事がちらほらきかれ、二十九日の第二回交換日にも夢よう一度と会場に出向いたが、殺氣立つ

た多人数の人々に圧倒され入手する事が出来なかつた。ばかばかしいおそまつ
▽人災か不可抗力かと騒がれた鶴見事故の、半ば忘れられそうになつた十一月九日は関係者、遺族方にとつては決して忘れることの出来ない日付であろう。鶴見の事故現場には慰霊塔も建てられたが、全国民、慰霊塔を建てて一周忌終つて事足れりとは思ふまい。
▽今月号は、今年のしめくくりとして、ながらく誌上を飾つて頂いた林氏の「茶の湯に生きた人びと」、鶴田氏の「家康と登善天室」を完了掲載した。

▽新年号から鈴木成元大正大学講師の「日本浄土教物語」を連載の予定、ご期待下さい。
▽本誌がお手もとに届く頃には師走。来る年にもよろしく。内にも外にも幸多からん事を心より希います。

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 十二月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十九年十一月廿五日 印刷

昭和三十九年十二月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田町一ノ廿二

発行所 法然上人鐵仰会

電話東京二六二局五九四四番

機替東京八二一八七番

日本一の生産・設備

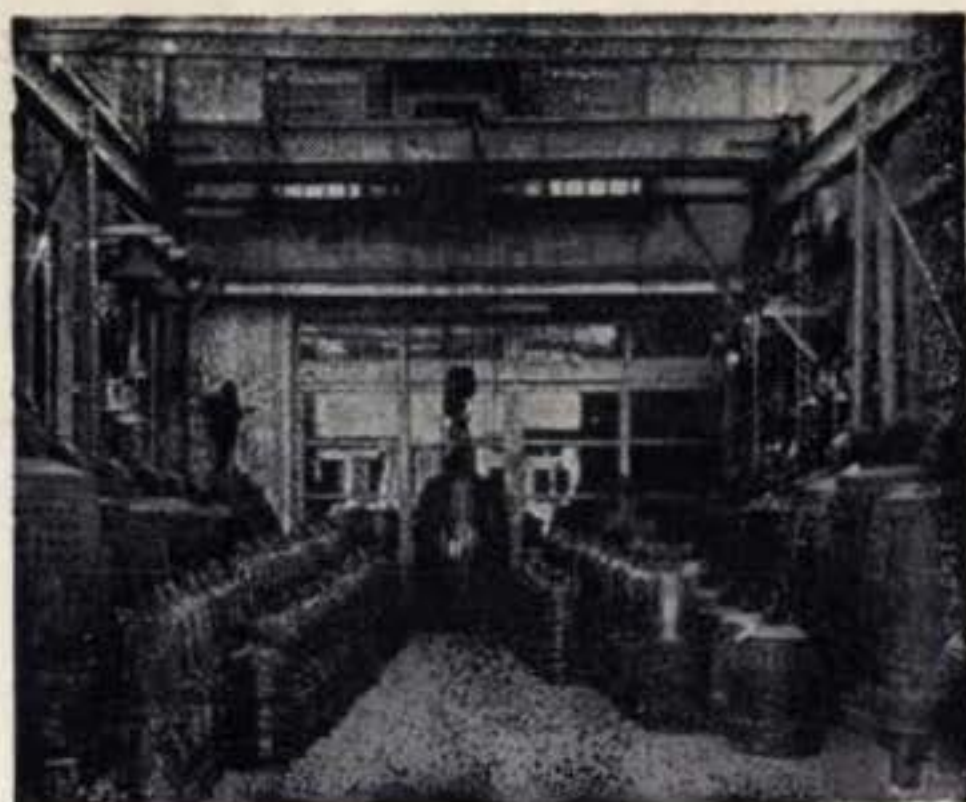
梵鐘 (45cm ~ 85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm ~ 51cm)

音響 理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事 香取正彦先生
芸術院賞受賞



鋳物師 老子次右衛門

株式会社 老子製作所

富山県高岡市横田 電話 (2) 0258. 1341

香りたかき浄土トラクト —既刊—

選択集私解	大正大学教授 竹中 信常著	新書判 120 P	価 120円 下 30円
真理のはなたば	大正大学教授 佐藤 良智著	新書判	価 70円 下 20円
日常勤行式の解説	村瀬 秀雄著	新最判 90 P	価 100円 下 20円
信仰への導き	文 博 佐藤 賢順著	B 6 判 16 P	価 15円 下 10円
ご法語のしおり 葵ぐさ	村瀬 秀雄著	B 6 判 16 P	価 15円 下 10円
浄土宗のおしえ	大正教授 宮林 昭彦著	新書判 20 P	価 25円 下 10円

念仏をひろめるために心をそそぐ布教家に (多数申込みには
真実の信仰をもとめている檀信徒の方々に 割引いたします)

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (262) 5944
振替 東京 82187